

自主・創造・根気

第29号

2019. 3. 22

三田市立狭間中学校

今年度もまもなく終了、1年間お世話になりました

今年度も学校目標を「人間尊重を基盤とし、確かな学力と豊かな心でたくましく生きる生徒の育成」とし、教育活動を行ってまいりました。保護者の皆様から見られて今年度の取り組みはいかがでしたでしょうか。

保護者の皆様のご理解とご協力により、学校行事も円滑に実施することができ、1年間の教育課程をすべて修了することができました。衷心より感謝申し上げます。

子どもの教育において、第一義的責任を有するのが保護者であり、自立的に生きる基礎を培い、国家及び社会の形成者としての基本的な資質を養うのが学校です。子どもたちが健やかに成長するためには、教育における役割と責任を家庭と学校それぞれが自覚するとともに、相互の連携と協力が不可欠と考えています。

今後も更に家庭と学校、地域が連携を密にして子どもたちの成長を見守り、子ども、保護者、教師の三者が笑顔の関係でいられる学校にしていきたいと思えます。

来年度もまた新たな気持ちで、教職員一丸となって取り組んで参りますのでよろしくお願いいたします。

逆境をプラスに変える

2001年にノーベル化学賞を受賞された野依良治教授が、「いんげん(マメ科植物)のよりよい^{のよりよい}を使った実験をされています。

「いんげん」のつるは、自然のままだと右巻きに伸びていく性質があります。そのつるを①そのまま伸ばした場合、②強制的にまっすぐに伸ばした場合、③自然とは逆の左巻きにした場合の3つに分けて収穫量を調べたそうです。

結果、収穫量は①「そのまま伸ばした場合」よりも②「まっすぐに伸ばした場合」の方が1.5倍多く、更に③「自然とは逆の左巻きにした場合」は2倍多くありました。

本来の習性に任せて自由気ままに生育させるよりも、適度なストレスを与えた方が成長には良い効果があったということです。

生物には、逆境をプラスに変える力があるのです。

「雨ニモマケズ」のころ

*鍋島直樹(龍谷大学教授)

「雨ニモマケズ」 宮沢賢治

雨にも負けず 風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫なからだをもち
慾はなく 決して怒らず いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と 味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを 自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分かり そして忘れず
野原の松の林の陰の 小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子供あれば 行って看病してやり
西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば 行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろといい
日照りの時は涙を流し 寒さの夏はおろおろ歩き
みんなにでくのぼーと呼ばれ
褒められもせず 苦にもされず
そういうものに わたしは になりたい

宮沢和樹(賢治の弟清六の孫)によると、「雨ニモマケズ」の詩の中で、宮沢賢治が大切にしていた言葉は「行って」でした。

宮沢賢治は、その場所に行って自分の身をおくことが大事であると考えていました。そこに行ったこと、ここに来てくれたこと、それが大切なのです。悲しみに打ちひしがれている現場に行くと、本当の世界が見えてきます。

「行って」というのは、そこに行った時だけではありません。行く前から相手との出遇いが始まっています。進み始めた一歩一歩の中に、相手の気持ちに歩み寄ろうとする自分の気持ちがあります。

思い切ってそこに行こうと決心した時には、まだそこに到着していなくても、訪ねていく中に思いがけない気づきや絆が生まれます。じっとしては何も開かれないのです。

「行って」という姿勢には、身体が相手のもとに行く時に、心も相手に寄り添うことになると教えています。